

連載 (供覧) いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす  
世界平和のための祭祀を復興させる

### 第三十三回 経典等の危ふさ

南出喜久治 (令和8年元旦記す)

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち  
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

しかし、このやうな矛盾と虚偽による宗教は、人類にとって百害あつて一利なしです。宗教の説く徳目の有用性を認めることができるとする見解もありますが、その殆どは、祭祀の道を歩んで営んできた徳目であつて、宗教の徳目といふのは、その殆どを取り込んだだけで、独自のものではありません。宗教がなくても、祭祀の徳目と生き続けるのです。つまり、宗教を全否定するだけであつて、宗教の説く徳目を全否定するものではありません。

祭祀の徳目とは、後に述べるとほり、祭祀の根源である人類の「本能」に由来するもので、本能に適合するもの、本能適合性のあるものが徳目として認識されてゐるのです。

また、特定の宗教における徳目ないしは規範は、その宗教団体の組織を維持するためのもので、他宗派では通用しません。普遍性がないのです。

しかし、祭祀の徳目は、人類の本能に根付いてゐるために普遍性があるのです。

共同社会を維持するための集団本能である社会維持本能として、たとへば憐憫の情があり、それによる行動によつて困窮者らに援助する助け合ひによつて社会が維持されます。それを社会が評価して顕彰されなくても、陰徳を積むことも本能行動として存在するので、利他は本能行動なのです。人の本能は、自己を犠牲にしてでも利他を行ふことに快感を覚えるやうな仕組みになつてゐるのです。こんな当たり前の行ひを大層に神仏に認めてもらふよりも、自分の祖先や、援助された人の先祖に褒めてもらつて喜んでもらふ方が精神的に落ち着くものなのです。

大乘経典や聖書に書かれてゐる内容が危ふいか否かとは離れて、ここでは、このことに加へて、その成立の危ふさについて述べてみたいと思ひます。

大乘經典は釈迦の教へではないとする大乘非仏説論は、古くはインドにおいてもありませんでしたが、それは当然のことでした。

カースト制度のインドの地で、西暦紀元前 566 年に生まれた釈迦が説法を説き始めて 80 歳で亡くなるまで、釈迦が率ゐたサンガ（出家修行者集団、僧伽）では、その教へは口伝によるものとされ、經典は存在しませんでした。

ところが、サンガの伝統のとほり口伝のまま伝承した小乗仏教と呼ばれてきた上座部仏教（修行者仏教）とは異なり、戒律を守る出家集団も、これを守らない在家も、ともに解脱とするための大きな船に乗ってゐるとする大乘仏教（大風呂敷仏教）によつて、釈迦が教説を説き始めてから約 600 年以上を経てから初期の大乘經典が作られ始めます。

江戸中期の富永仲基が『出定後語』で説くやうに、正確に口伝として伝はつたものが大乘經典に正確に反映されたとする荒唐無稽の仮説は成り立ちません。釈迦の教へ（經藏）を含む原始仏教聖典とされるパーリ語三藏は、大乘經典が全く含まれず、チベット大藏經や漢訳大藏經など、時代と場所と言語などを異にする大乘經典は、これに携はつた多くの思想や教説が混在し、変質して行つたものです。

紫式部は、「源氏物語」（蛩）で、「悟りなき者は、ここかしこ違ふ疑ひを置きつべくなむ」として、仏教經典のあちらこちらに食ひ違つことが書かれてゐることを指摘してゐますので、經典相互の矛盾は、平安時代でも解つてゐたことなのです。

そして、32 歳で没した富永仲基は、死の直前に刊行された『翁の文』において、儒教、仏教、神道の三教を批判的に觀察してこれらを排除し、「誠の道」といふ人々のあたりまへの認識と判断に基づいた道を説きました。比較觀察の手法は、古くは、儒教、道教、仏教を比較して仏教を最も優れたものとした思想劇作である空海の『三教指帰』（さんがうしいき）があり、これを彷彿するものですが、ここでは、残念ながら神社神道と古神道（祭祀）との区別がなされてをらず、神社神道は今の世の中で行はれる道ではないとして神道（神社神道）を否定してゐます。そして、この著述に影響を受けた本居宣長は、儒仏を排して古道（ふるみち）に帰るべきと国学を説いたのです。しかし、「誠の道」や「古道」が祭祀の道であり、惟神の道であることには到達できませんでした。

本居は、天照皇太神宮や諸神、特に、流水の分配を司る水分神（みくまりのかみ）を拝礼し、祖先やすべての衆生の極楽往生を願つてゐますが、それは浄土宗の信仰と一体となつたものです。後期水戸学の会沢正志斎に対しては、臣道あつて君道なしと批判し、その尊王思想を評価してゐません。

本居が漢意（からごころ）を排除するといふのはあくまでも建前上のものであり、堀景山や荻生徂徠などの儒者の影響を受け、さらに、藩主の徳川治貞に仕へたこともあつて、

一君万民の皇国観や天皇への崇敬を説いたことがあります、これらは儒学（儒教）による「天皇教」を説いたもので国学とは何の関係もありません。後世において、本居の国学に影響を受けた者が尊王思想を強く打ち出したのであつて、本居自身は決して尊王の人でも祭祀の人でもありません。

本居が詠んだ有名な和歌に、「しき嶋のやまごゝろを人とはゞ朝日にゝほふ山ざくら花」がありますが、この山桜は水分神社の山桜だと解釈できます。本居は、「古事記伝」を完成させた研究者としての功績については絶大なるものがありますが、それ以外の論述等には国学としての意味がありません、国学が我が国の國體（くにがら）を究明する学問であるとすれば、それは祭祀に迫るものでなければならず、天皇祭祀と臣民の祭祀との相似性が確認されることのない国学といふのは、国学の名に値しないのです。

ところで、仏教や儒教の原典についてもさうですが、ユダヤ教、キリスト教及びイスラム教においても、旧約聖書もモーセの著述か否かが解らないし、新約聖書もイエスの著述もでもない、このやうなことは、仏教ほどではないとしても、偽書の類ひと言へます。キリスト教といふのは、イエスの教へではなく、これを教団宗教化したペテロとパウロによつて組み立てられたもので、ペテロ・パウロ教と言ふべき教へです。